風船虫

小川未明

青空文庫

原っぱは、烈しい暑さでしたけれど、昼過ぎになると風が出て、草の葉はきらきらと光っていました。昨日は、たくさん雨が降ったので、まだくぼんだところへ、水がたまっています。もうすこしばかり前でありました。

「きょうは、きっとよく釣れるよ。」といいながら、徳ちゃんは、釣りざおとバケツを持って先に立ち、後から、正ちゃんが、すくい網をかついでここを通ったのです。

年ちゃんは、毎日のように川へいくと、おばあさんにしかられるので、今日は、いっしょにいくのをやめたのでした。二人が、もう川へ着いた時分、年ちゃんは、原っぱへきて、お友だちをさがしていました。

「やあ、きれいだな。」と、年ちゃんは、水たまりのところに立ち止まって、大空の白い雲が下の水の面に映っているのをのぞいていました。

ちょうど、同じ時刻に、あちらには、誠くんが、さびしそうに独りで遊んでいて、年ちゃんを見つけると、

「年ちゃんおいでよ。おもしろいものがあるから。」といいました。

「なあに。」と、年ちゃんは、もはや雲のことなど忘れてしまって、その方へ駆けていきました。

「風船虫が、いるよ。」と、誠くんは、穴の中を指しました。

その穴は、このあいだ、みんながボールをして遊んでいると、ペスがきて、しきりに前足で掘っていたところでした。

年ちゃんが、水の中を見ると、黒い虫が、五、六ぴきも底の方を往ったり、きたりしていました。

「これが、風船虫なの？」

「ああ、風船虫だよ。」

「君は、釣りにいかなかったのかい。」と、年ちゃんが、誠くんに聞きました。

「きょうは、早くお湯に入って、お母さんとお使いにいくのだから。」と、誠くんは、いかない理由を、語りました。

「僕、風船虫をお家へ持っていこうかな。」

「ああ、二人で分けようよ。」と、誠くんがいいました。

そこで、年ちゃんと、誠くんは、紙片の中へ虫を半分ずつ分けて、二人は、めいめいお家へ持って帰ったのであります。

年ちゃんは、風船虫をサイダーの空きびんの中へ入れました。そして、小さく紙を切って、水の中へ落としました。すると、風船虫は、紙片の沈むのを見て、急いでそれにつかまりました。そして、いっしょに下へ沈んでしまうと、今度は、自分の体を浮かしにかかったのです。すると、紙片が、ずんずんと下から上へ引き上げられてきました。やがて水の上まで着くと、風船虫は、紙を放しました。紙片は、また水の底の方へ沈んでいきました。風船虫は、あわてて、これを追いかけるように、銀色の体を光らして、水をくぐって下の方へ泳いでいきました。そしてまた紙を上に引き上げにかかるのでした。

「おもしろいな。」と、年ちゃんは、喜びました。しかし、いつまでたっても、風船虫は、飽きるということなく、同じことをくり返していたのです。

年ちゃんは、しまいには、ごろりと畳の上へ寝ころんで、びんの内で風船虫の体が、ぴかぴかと輝くのを見ていました。

「風船虫って、きれいな虫だな。」と、年ちゃんは、つくづく感心していました。

そのうちに、年ちゃんは、眠ってしまいました。ところが、目がさめて見ると、びんの中には、一ぴきも風船虫はいませんでした。

「どこへ飛んでいってしまったろうか。」と、年ちゃんは、しばらく、ぼんやりとしていました。

その明くる日のことでした。年ちゃんは、大きなかしの木の下で、道具箱を下ろして、あしだの歯を入れているおじさんと話をしていました。

「おじさんのとこに、学校へいく子供がある?」

「ええありますよ。ちょうど坊ちゃんと同じくらいの。」と、おじさんが、いいました。

年ちゃんは、考えていました。

「おじさんのお家は、町の中にあるんだろう。子供たちは、どこで遊ぶの?」

「やはり、往来で遊んでいますよ。」

「おもしろい虫を今度捕らえてきてあげようか?」

「虫ですか? きりぎりすですか。」

「おじさんの知らない虫だよ」

「はて、なんという虫ですか?」

「風船虫というのだ。」

「ああ、風船虫なら知っていますよ。」と、おじさんは、笑いました。

「町の中にも、風船虫がいるの?」と、年ちゃんは、びっくりしました。

「私の家の近所に呉服屋さんがありましてね。毎夜ショーウインドーに燈火をつけますが、燈火の下へコップに水を入れておくと、風船虫が飛んできて入りましてね、紙片を上げたり、下げたりして、ひとりでに窓飾りになりますよ。そして、夜が明けると、どこへか飛んでいってしまいます。」と、おじさんは答えました。

「ふうん。」と、年ちゃんは、感歎したのでした。

いまさら、この自然の大きいということが、そして、小さな虫が、自由に、気ままに生活しているということが、なんとなく不思議に考えられたので、年ちゃんは、思わず、青い、青い、空を見上げたのでした。

昨日、水たまりに姿を映した白い雲が、今日は、あちらの高い木の上を飛んでいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　12」講談社
　　1977（昭和52）年10月10日第1刷発行
　　1982（昭和57）年9月10日第5刷発行
底本の親本：「日本の子供」文昭社
　　1938（昭和13）年12月
初出：「児童文学」
　　1936（昭和11）年9月
※表題は底本では、「風船虫《ふうせんむし》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年10月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風船虫

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/